

# 原初性漂う歴史民俗フィールドの頸城野

—新潟県上越地方—

石塚正英\*

## Kubikino (The Joetsu region of Niigata Prefecture)

—a historical and folklore field with a sense of primitiveness—

ISHIZUKA Masahide\*

キーワード：先史文化，文化の2類型，儀礼，自然

### 1. 藤塚山塚列に分け入って

四半世紀以前から、歴史民俗学上のわが仮説はこうである。先史文化とそれ以後の文明文化は類型を異にしている。その基準の一つは神観念にある。先史における神々は物質的ないし動植物的であり、自然的である。それに対して文明の神々は霊的であり不可視的であり、超自然的である。先史人は神々を動かして共に仕事をするが、文明人は神々を敬い宥めつつ加護を求める。私の研究テーマは、先史と文明の端境期を特徴づける文化に集中してきた。そのテーマに関連する有意義なフィールドとして、上越市三和区に残る藤塚山列塚遺跡がある。

2023年5月14日午後、上越市三和区藤塚山の山林中に正体不明の饅頭型土塊 約10基(資料によると総数52基)に遭遇した。藤塚山から錦山、本郷山へと縦断するように数十基が一直線に並び、ところどころで右側数メートルの幅をあけてもう一列が並ぶ。現在は杉(植林)や雑木に覆われている。測量の結果、平均的な塚は以下のとおり。直径5~6メートル、高さ1.2~1.5メートル。連続する塚の間隔は6~8メートル。

\*理工学部情報システムデザイン学系非常勤講師 Part-time Lecturer, Division of Information System Design, School of Science and Engineering

参考資料の「藤塚山の塚」(市村重雄編『美守史話』美守公民館、1956年)によると、発掘の結果遺物は発見されていない。縦列形式の目的・用途としては、古代の防塁でなく、私有地が発達した平安時代以降の境界線か、あるいはまた近くに大間城があるので旗塚か、と幾つか可能性が記されている。今回の調査の限りで考察すると、連続する塚に一定の間隔が設けられているので、塚群は土塁のような防御線ではない。遺物が出土していないので古墳ではない。軍旗を立てて陣形を模したかどうか、それも定かではない。三和区は緩やかな山地である。私としては、縄文弥生時代に存在した集落間の儀礼的境界線かとも想像する。藤塚山には、尾根伝いに縦列の遺構が残っている。魍魎魍魎の出没する峠や尾根ならば、境界地帯を設けるには相応しい。境界といっても、隣接する集落間の狭隘ではない。原生林や山野、河川など、自然によって一定程度隔てられているところの只中ということである。

三和村史編さん委員会編集『三和村史 資料編』(2002年刊)「第1章 古代・中世」の項に、「藤塚山塚群・前山塚群」「錦山塚群」としてそれぞれ関連記述が掲載されている。必要箇所を引用する。「調

査の進む道筋で、火で土地を浄める、木炭を入れるなどの祭祀遺構が、発見されることがあるかもしれないという期待を込めて、塚の中央を南北七段の溝状の試掘溝を入れた。／この層から縄文時代中期の土器片が出土したが、土地を浄める行事の跡や、祭祀に関連した埋葬品などは発見されなかった」（38頁、／は改行を示す）。

『三和村史』に記されたこの調査報告は、藤塚山の列塚遺跡群を縄文弥生時代に関連させて考察する私の仮説にとって、はなはだ重要である。藤塚山遺跡は先史時代に形成された祭祀儀礼に関連するのだろう。なるほど、かくも長大な一列をなす列塚を構築した人々の造営意図について、だれにも見当がつかない。しかし、平野団三は、この地の塚群に関連して、論稿「古代頸城文化の内証」（1955年）の中で以下の様に考察していた。「更に驚くべきことは美守村錦より始まって吉川村原の町附近で終わる、延々一六キロメートルにわたる二百有余の大列塚群である」（平野団三著・石塚正英編『頸城古仏の探究』東京電機大学石塚研究室刊、2000年、11頁）。メンヒル（立石）、ストーンサークル（環状列石）、アリニューマン（列石）など古代世界各地の石造物にも共通する先史的観念を、藤塚山遺跡の造営遺構（列塚）にも当てはめる必要があると思われる。無理に現代的な類推による意味を求めず、先史文化の残存という仮説に考察を深めるのである。

## 2. 風の三郎儀礼にみる農民精神

「風の三郎」とは、新潟県の中越から上越一帯に営まれてきた風の神に関する民間信仰・農耕儀礼およびその呼称である。田植え後に生長する稲（風媒花）の受粉に役立つ風は、秋になると農作物に甚大な被害を及ぼす台風ともなる。好悪の念が交差する自然神である。人々は、どちらかというと後者に備えて風の神を祀った。風の神による祟りを鎮める、あるいはこれを和らげたり回避したりするためである。このテーマに関するフィールド調査で私は、上越市吉川区の民俗研究者である吉村博先生の案内を受けた。私は、先生がお亡くなりになるまで平成時代の約15年間、尾神岳ほか頸城野各地における

石仏調査、疱瘡儀礼調査などをご指導戴いた。

さて、風の神信仰は、もともとは農耕庶民の営む名もなき儀礼を下敷きにしている。こちらは吹いて欲しくない風（の神）を撃退するか、あるいはせめて村はずれでやり過ごすかするための儀礼である。それが元来の「風の三郎」儀礼である。けれども、やがて農山村にも人智のおよぶところとなるや、風の神は仏教や神道の神々と習合し「志那都比古命」「風大神」など崇高な名称を帯び、本来はやって来てほしくない暴風（風の三郎）を撃退する役を演じるようになる。しかし、もともとの儀礼はそう簡単には廃れない。そこに「風の三郎」儀礼の先史的特徴がある。

暴雨を制御する神でなく、暴風そのものにもなる風の神について、かつて農民は鎌で対決する儀礼「風切り儀礼」を行った。かつて中里村（現・十日町市）ほかで行われていたこの風切り儀礼は、神事としては信州諏訪大社の薙鎌儀礼と関連する。薙鎌は、日本神話における奴奈川姫と建御名方命母子に因む儀礼「薙鎌打ち神事」で用いられる神器である。鳥の嘴のような形状（元々は蛇と思える）をし、神木の幹に打ち込んでそのまましておく。中には表皮に覆われてしまうものもある。この儀礼は、糸魚川から諏訪に向かう姫川上流（信越国境）にある境の宮（長野県北安曇郡小谷村戸土）・小倉明神社（長野県北安曇郡小谷村中股）二箇所諏訪神社（長野県諏訪市）の御柱祭前年、つまり七年に一度、交互に行われてきた。本儀礼は糸魚川地方では「薙鎌祭」として現在に伝えられている。農民たちの間では草刈鎌を打ち込む事例がある。ようするに「風神の怒声を静め」「風神を征服する」儀礼なのである。（写真は十日町市川治の石像、故吉村博氏撮影）



## 3. 平成の神仏虐待儀礼（マルタ、法定寺）

平成初年に開始した私の頸城野フィールド調査は、これまでに4度ほど大きな山場を迎えた。1度目の山場は平成6～8年ごろに訪れた。当時の調査

テーマは「神仏虐待儀礼に晒された石仏」だった。そのヒントは地元のフィールドワーカー平野団三先生の著作にあった。そこを読んで私の眼は点になった。法定寺石仏信仰の中核は雨乞いにある。「一度び干天が続いて水騒動が起きそうになると大変である。村人達は酒やくさぐさのよき品を雨降り地蔵の前に供え、いろいろと祈願の上、荒縄でこれを縛り、池の中へドブドブと何回も投げ込むのである。『よいか、雨を降らすか』と、雨降り地蔵が音をあげるまで投げ込む。雨降り地蔵こそ大変な災難である。昭和33年、今年も大日照りで水に困り、皆青くなった。耕耘機も動く今日であるけれども、万策尽きて井ノ口で雨降り地蔵に雨乞いの行事をしたところが、翌日沛然とした雨になったのである。人々は今更ながら、その功德の宏大無辺なのに驚いたのである」（平野団三著・石塚正英編『頸城古仏の探究』、28-29頁）。

私は頸城野のほか、地中海のクレタ島やマルタ島でもフィールド調査をしてきた。古代の地中海沿岸地域には苛められる神々がいた。敵との戦いで怖気づいて逃げ出さないよう縄で縛られたヘラクレス神像、よそへ飛んで行かないよう羽根をもぎ取られた幸運の女神たち。それから、エジプト神話やシリア神話には、ちょうど日本神話（オホゲツヒメやウケモチ）と同じように、植物再生のために殺害される神々の物語があり、そのような石像や木像、藁像



などが造られた。こうした神々は、神の座にあるがゆえに、ときとして信徒たちに激しく攻撃されるのである（写真は上から、1996年6月越柳、2007年7月井ノ口での雨乞い虐待儀礼、筆者撮影）。信徒たちの無病息災を維持するべく神通力を発揮するよう、強請を受けるのだ。それと類似した神仏虐待儀礼が平野著作に記されていたのであるから、私の



比較宗教民俗学研究はわが郷土で全面展開しだしたわけである。村人に共通の信仰として、また生きた儀礼として神仏虐待が今日にのこる地域は、日本ではもはや上越市三和区（旧三和村）をおいてほかにない。それどころか、これが村レベルで現存している実例は、世界でも稀といって差し支えなかろう。法定寺系石仏群に備わるこうした神仏虐待儀礼は、頸城野が世界に誇ることのできる一級の文化遺産なのである。

#### 4. フィールドワーク 30 有余年

1965年3月つまり高田市立（現上越市立）城北中学卒業の春、私は同学年の地質クラブ・メンバーとともに、長野県北部の野尻湖でナウマン象の化石骨を発掘する作業に参加した。この発掘は東京経済大学の井尻正二教授が中心となって企画したもので、この年でたしか4回目だった。大学の研究者のほか小中高の教師や生徒が参加して行われた。ほんの数週間前に私が入試に合格したばかりの新潟県立高田高校の地学部メンバーも参加していた。

いま振り返れば、この発掘は私にとって重要な体験となった。その時に受けた素晴らしい印象に裏打ちされて、私はのちに頸城野の民俗フィールドワーカーになっていくのだった。そのとば口で、のちにわが「頸城野学」を構築するに際して師匠となる人物に出遭う。1991年4月15日、私は郷土の仏教美術史家である平野団三翁（1905-2000）の大著『越後と親鸞・恵信尼の足跡』（柿村書店、1972年）を読んでみた。その動機は、信仰において仏像も寺院もことごとく否定する親鸞思想への接近にあった。そうだ、親鸞は遠流の地・くびき野で初めて親鸞になったのだった。「出家人の法は、国王に向って礼拝せず」（化身土文類末）の親鸞は、頸城野で「悪人正機」（嘆異抄）の根性を鍛えた。そのような心境のうちに、私の親鸞読書は旺盛となっていく。

けれども、こうした読書の出立点で私は、親鸞のことはとりあえずどうでもいいような記述に出会ってしまった。1991年4月22日のわが日記にこう記されている。「平野団三著作読了（後半は乱読）。たいへんな記述にうれしくも、ぶつかる。法定寺の雨ごい地蔵の『奇習』だ。これぞパウサニヤス、ス



エトニウスに通じる、縛る神だ！」この前後数日『教行信証』を乱読していたが、実はそれは『嘆異抄』ほどには面白くなかったのである。観点が神仏虐待儀礼（フェティシズム）にあったからだった。それにひきかえ、平野著作はビックリものだった。同年5月には書簡で平野翁と交信することが叶い、翁は頸城野の雨乞い地蔵調査への協力を快諾してくれた。こうして、私の石仏フィールドワークは一挙に開始した。まさに、血わき肉おどる思いがした。そのフィールド人生の最大局面が2023年5月に訪



れた。藤塚山遺跡の調査である。心強い地元研究仲間の松井隆夫、高野恒男の両氏と一緒にだった（写真参照）。

2019年12月に立正大学で行われたわが研究生生活50年を記念する講演で、私はこう述べた。「私は机上で研究することは嫌いではありませんが、しばしば野外にでて研究してきました。フィールドワークです。去年、私は転倒して頭蓋骨と脳の間を出血してしまいました。硬膜下血腫というのです。それ以来フィールド調査にはでかけていないのですが、来年の2月には済州島に行きます。前々から「海女」や「巫女」の文化誌・民俗誌に関心があったのですが、いよいよ現場に立つことができそうで、まずは机上で資料を読み準備中です。日本の習俗にもおおいに関係しています。ワクワクしています」（『感性文化のフィールドワーク』同編集委員会、社会評論社、2020年、32-33頁）。

私の生涯にわたる研究テーマは「フェティシズム」である。価値転倒の哲学である。その歴史的・現実的発現形態の一つに地中海沿岸や頸城野に観察されたのだった。フィールドワークに出かけないでいられるわけがなかった。

思い起こせば、社会学者のコント、デュルケム、『資本論』のマルクス、精神分析学のフロイトたちが夢中になって探究したフェティシズム研究を、私は1991年になって神仏虐待儀礼として本格的に開始したのだった。

私の研究の奥深いところというか、ベースには合

理主義や科学知によって軽視されたり拒否されたりした、先住民的、先史的な文化への接近がある。その代表がフェティシズムという人間精神・儀礼行動である。基本的には宗教前の儀礼だが、これは価値転倒そのものの儀礼なわけで、善と思う基準、悪と思う基準は、ある儀礼により入れ替わってしまう。その儀礼を、フェティシユという神を持ち出して執り行う。人はフェティシユを崇拜し、信仰する。しかし、あるとき、役立たずになれば違うフェティシユに取り代える。その好例は、1960年代に西アフリカのギニアビサウでポルトガル軍と戦う先住民の武器であろう。開戦時にはワニの鱗などをフェティシユとして持ち歩いていた彼らは、敵の武器が優れていることを知って、自らのフェティシユを機関銃に代えていった。フェティシユそのものの信仰は持っているけれども、フェティシユという神が、自分たちと相対して使い物にならなかつたら捨てていってしまう。

現代人であれば、これは善なのだという基準は決まっている。だが、フェティシズムの世界では入れ替わることがある。それが私の研究で土台になっているものである。学術面で当時の最前線にうってでるフィールドの素材フェティシユ（物神）を、幸運にもわが故郷の頸城野（新潟県上越地方）に発見した。

最後に現地調査からほんの一部を記しておく。

- ☆関山神社石仏群調査、新潟県妙高村関山（1991年）
- ☆法定寺・雨降り地蔵調査、新潟県東頸城郡浦川原村／安塚町／中頸城郡頸城村／吉川町（1992年）
- ☆地中海マルタ島・ゴゾ島・カルタゴ（チュニス近郊）・クレタ島・アテネ等石造物調査（2001年）
- ☆明日香村先史石造物・立石調査（2004年）
- ☆熊野磨崖仏調査、豊後高田市大字平野（2006年）
- ☆佐渡小木磨崖仏調査、佐渡市小木地区宿根木（2007年）
- ☆新羅時代石造物（石窟庵・仏国寺ほか）調査、韓国慶州（ギョンジュ）市ほか（2008年）
- ☆埼玉県東松山市の坂東十番霊場厳殿山正法寺の岩窟および石仏群調査（2016年）
- ☆保渡田古墳群（高崎市）調査・見学（2017年）
- ☆上越市三和区藤塚山における藤塚山塚列調査（2023年）